毎月11日掲載

防災・減災のページ

むすび塾

隣近所 支え合い重要

避難行動の課題

巡回ワークショップ　＠宮城・亘理町「あぶくま町内会」

東日本大震災の教訓を今後の備えに生かすため、河北新報社は11月23日、巡回ワークショップ「むすび塾」を宮城県亘理町の町荒浜地区交流センターで開いた。東北以外の開催も含めて通算26回目。甚大な津波被害を受けた荒浜地区のあぶくま町内会の住民9人が、減災・復興支援機構（東京）の木村拓郎理事長の進行で、避難行動や現地再建の課題を話し合った。

荒浜1～5丁目は震災前、454世帯あったが、津波で多くの家屋が流失。5丁目は災害危険区域に指定され、1～4丁目で自宅を再建したり、直したりして戻ったのは約50世帯にとどまる。五つの行政区（町内会）が3月末に合併し、あぶくま町内会が誕生した。

津波被災地に住み続ける参加者は、生々しい津波の記憶と再度の襲来への不安を抱えていた。津波からの避難は震災発生当時と同様、自家用車に頼らざるを得ないと考える参加者が多かった。

非常用の水や食料を自宅に用意し、車に防災グッズを積む参加者がいた一方、「津波のことはあまり考えない。心配しすぎたら住めなくなる」との意見もあった。

人口が減り高齢者が多い地区では、要援護者の避難への対応が課題となっている。

副会長の宍戸定男さん(69)は、自分か妻が必ず自宅に居て、90代の両親と避難できるようにしている。

「隣近所の付き合いは長いが、迷惑になるから頼れない。頼めばこちらの気持ちの負担にもなる」と、複雑な心境を明かした。

別の参加者は仕事の都合で、自宅で1人になる90代の祖母が気掛かりだという。「見守り活動などでフォローしてもらえる仕組みがあればありがたい」と望んだ。

沿岸部が津波被害を受けた隣町の宮城県山元町花釜行政区で、復興まちづくり活動に取り組む菊地慎一郎さん(66)も話し合いに加わった。車で避難する際、1人暮らしの高齢者を近所の人が乗せる取り決めを紹介。「一人も見捨てるようなことなく、自主的に避難できる地域を目指したい」と述べた。

4月に活動を始めたばかりの町内会は、新たな絆づくりや地域再生策を模索している。まちづくりを担う若い世代がいないことや、住民が自由に集まれる施設がないことが課題に挙がった。

地域の将来像をどう描くか。「みんなまだ心が揺れている。新しいことを始めるのは時期尚早だ」「津波の印象を拭い去らないと人が戻ってこない」など、さまざまな意見が出た。「荒浜をどうしたいのか、町の考えが全く見えてこない」といら立ちを募らせる参加者もいた。

木村理事長は「隣近所の支え合いがないと、災害を乗り切ることは難しい。交流を深められる取り組みを、できることから始めることが大切だ」と呼び掛けた。

地域の再建と今後の備えについて話し合う参加者たち。会場の荒浜地区交流センターには、大人の背丈よりも高い位置に津波浸水高を示す表示がある

最大7メートルの津波襲う

宮城県亘理町の荒浜地区は、町東部に位置する。震災の津波は最大約7メートルとされている。

震災前の2011年2月末、地区全体で1366世帯、4576人が住んでいた。13年11月末現在、現地再建しているのは691世帯、2094人にとどまる。町内5カ所の仮設住宅に、同地区で被災した423世帯、1160人が暮らしている。

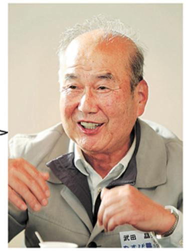
天然の漁場に恵まれ、ホッキ貝やシャコ、アナゴ、カレイなどが捕れる。震災前は、夏になると海水浴客でにぎわっていた。一年を通じて釣り客のほか、温泉施設や飲食店を訪れる観光客に人気があった。

■むすび塾に参加して
宮城・亘理町「あぶくま町内会」

【震災への備え】避難所の荒浜小から、もしもに備えて町内会の役員に校舎の鍵を預けると言われたが、預けられても困る。学校と話し合って、緊急時はガラスを割って校舎に入ってもいいことにしてもらった。
＝あぶくま町内会副会長・宍戸定男さん(69)

【震災への備え】非常食などは準備していない。荒浜には津波が来たが、万が一を心配しすぎると、住めない。命を守れるよう、避難先や方法を想定しておくことで十分ではないか。
＝ガソリンスタンド経営・中島一昭さん(55)

【震災後の不安】荒浜に戻った直後は、波の音がとても近くに聞こえて不安だった。今も地震が起きると、震度1や2ぐらいでも津波が来るのではないかと心配になる。
＝主婦・菊地美奈子さん(58)



【震災時の経験】仙台市内の映画館にいた。地震で天井が落ち、床を這いながら外に出た。その日から、仙台の娘の家や仮設住宅で2年近く避難生活を送った。いつ荒浜に戻れるか不安だった。
＝無職・武田晶夫さん(73)

助けられる負担 遠慮なく　宮城・山元町花釜行政区副区長 菊地慎一郎さん(66)

花釜も津波で被災した。戻って来た住民も少なく、荒浜と同じような課題を抱えている。昨年12月に町内会でむすび塾を開き、その後も住民同士で備えについて話し合いを続けている。

最も難しいのは、災害弱者への対応だ。1人では避難が難しいお年寄りが多いため、近所の人が車に乗せて避難することにしている。大ざっぱに誰が誰を乗せるというルールを決め、町の避難訓練でも実践した。

安否確認に無駄がないように、避難した場合は、合図として玄関先に何でもいいので布を縛り付けることを決めた。

お年寄りとその家族は、近所に遠慮して助けを求めない傾向がある。だが、気遣いは無用だ。自分だけ逃げる方がよっぽど後味が悪い。「助けられる側の負担」という考えを捨ててほしいと言い続けている。

花釜では、意思の疎通を図るため、顔を合わせる機会を意識的につくっている。ボランティアに手伝ってもらい、サークル活動にも力を入れている。絵手紙教室やダンス教室、男性向けには囲碁や将棋にも取り組んでみてはどうだろう。

再び津波が来たとき、できるだけ被害者を少なくしたい。荒浜とも何か連携できたらうれしい。